

595-146



1200501527310

95

46



6.12.7

6.12.7



序詞

この世のまじりのしるし

おとらのしるしのまじり

あまのしるしのまじり

この世のまじりのしるし

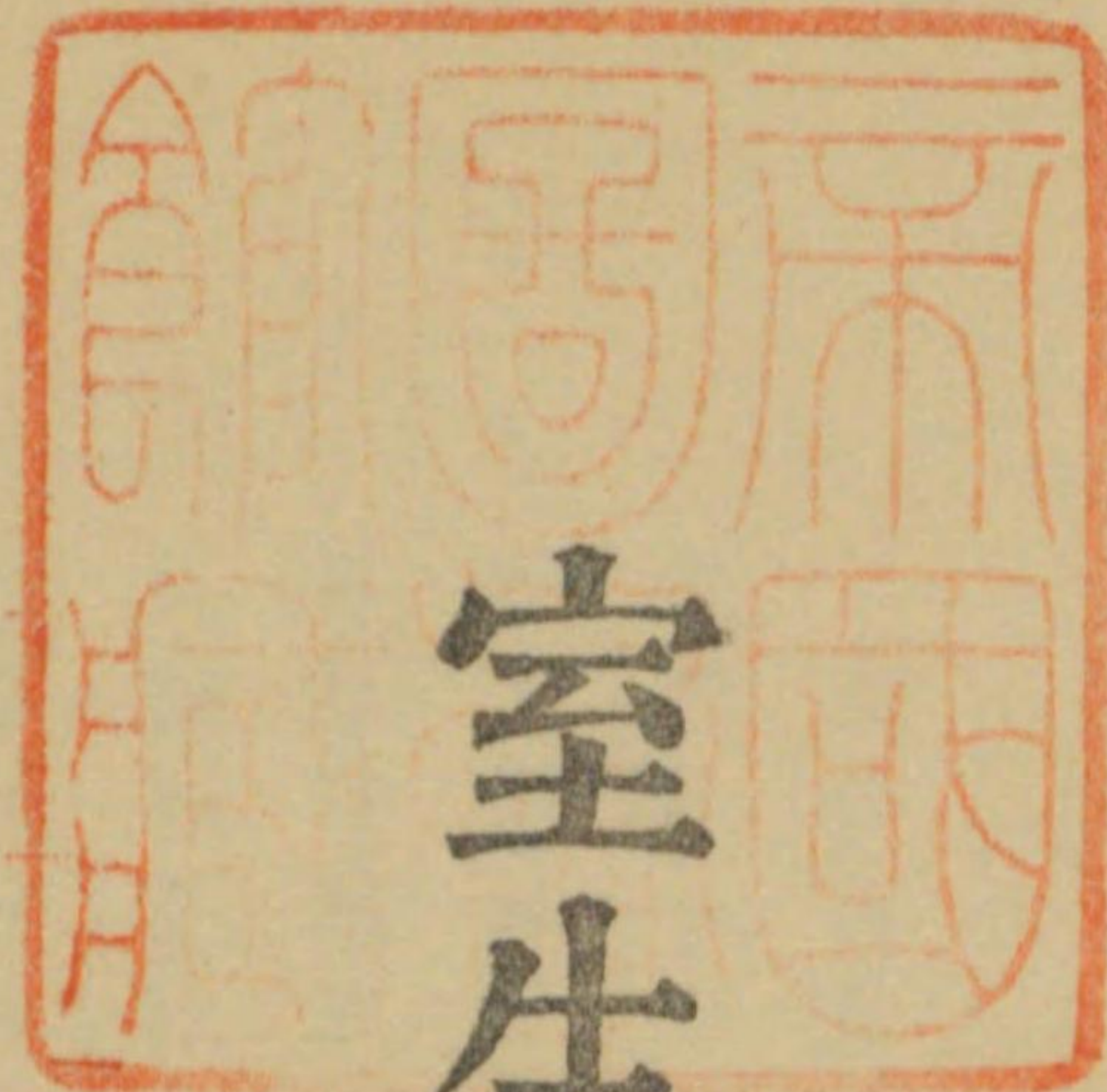
——ア——

山崎 拾遺 拾遺



室生犀星詩集





室生犀星詩集





595-146

室生犀星詩集の編  
選について

ずつと昔から、自分は室生犀星の詩が好きであつた。それでいつか機会をみて、特別愛誦する彼の詩篇を、自分の編纂で集めたいと思つてゐた。ところが今度第一書房から犀星詩集が出るについて、書房と著者の兩方から、自分のその選詩をたのまれたので、好期を逸せず、進んでこの編纂をひき受けることになつた。



しかしこの選集は、始めから自分がしたのでなく、著者の室生自身が彼の數多い詩篇の中で、特に自信あるものを厳選され、自分に渡された手稿の中から、さらに二重の選抜をしたのであるから、本來の意味に於ては、自分の選詩集と言ふべきでなく、單に著者の選詩について、取捨を加減したにすぎないのだ。若し始めから、自分の思ひ立つた編纂だつたら、或はもつとちがつた選詩をしたかも知れない。

著者の室生が自選した詩は、全體で二百七十餘篇あつた。その編纂の様式は、初期の小曲から最近の詩に至るまでを、年代順に配列したものであつた。讀んで行く中に、友の長い過去の生活、とりわけ自分との親しい交情が思ひ出され、

不覺の涙をさそはれるまで、追懷の情緒に耐へがたかつた。思へば小景異情の昔から、自分と室生とは水魚の交りをつくして來た。我々は詩壇に出世を同じくし、生活を共にして來た。

明白に言へば、自分と室生との間には一の避けがたい氣質の相違がある。それからして我々は、時に人生觀のイデオレヤを異にし、友誼の親しさからくる衝突を繰返してゐる。にもかかはらず、室生の詩をよんで感ずることは、本質に於ての彼と僕とがびつたり同じ種目の人間であり、同じ生活を生活し同じ人生を惱んで來たところの、眞の兄弟同志であつたといふことである。今、室生の過去の詩作を讀んで



一貫した彼の生涯ライフを考へる時、結局して友の求め惱んだ人生は自分の長く生活して來た道と同じであり、二人が共に求めたものは、共に同じ一つの宿命であつたことが、眞にはつきりとわかつてきた。自分と室生とが、いろいろな點に於て詩の特色をひとしくすることも、またむしろ當然と言はねばならない。

かうした室生の詩は、藝術的にさへも自分にとつて懐かしいのに、個人的な友誼の思ひ出が加はつてゐるため、一層愛惜の情が深く、殆どこれが取捨の選に苦しんだ。特にこの集の手稿は、室生自身が最初に自選したものであつたので、特別にまた選擇が苦しかつた。しかし本の頁數を限定

する都合からどうしても半數以下に削除せねばならないので、斷然自分の藝術的批判によつて、比較上での名作のみを選定し、全體で百三十二篇の詩を選んだ。

選の仕方は、自分の固く信ずる藝術的批判に訴へた。自分の見るところでは、室生の詩の最傑作と認むべきは、主として初期の「抒情小曲」と、最近の『忘春詩集』の二冊にある。他にも散漫には佳い作があるけれども、概して代表的な名作は、この前後二期の詩集に盡されてゐる。『愛の詩集』及びその以後に續刊された多くの詩集は、どういふものか散文的平面にながれてゐる。眞に詩的情熱の濃厚で、詩語に美しい音律を有するものは、主として前に言つた二詩集及び



その前後の作にあるやうだ。

そこで自分の選としては、主として『抒情小曲』と『忘春詩集』から大部を取つた。しかしその他の時期のもので、室生の或る詩風を代表すべきものは、勉めて選に入れるやうにした。例へば『愛の詩集』前後の作は、當時のいはゆる『感情派の詩』を代表した典型的スタイルであり、詩壇に広い範囲の影響を與へたもので、今日にも尙その感化が一般的とさへなつてゐるほどのものであるから、文獻的の意味からしても、代表的な作品を選入しておいた。他も夫々の詩集から、年代順に代表作を選んでおいた。

要するに自分は、大體に於て著者の意を尊重し、編纂の次

第も年代順とし、單に一部の詩の取捨選擇だけを、自己の自由鑑賞でしたにすぎない。しかしとにかく、自分はこれによつて座右の愛吟詩集を編纂し、我が親しき友の藝術と一緒に居られることを、この上なく満足にうれしく思ふ。尙最後に、友が友情あつき詩『萩原にあたふ』の一篇を、自分の藝術的見地からこの集に除いたことを、私情の上から寂しく感じてゐる。

萩原朔太郎



室生犀星詩集目次

春鳥異志

「抒情小曲集」抄出

小景異情	二七
その一	二七
その二	二九
その三	三一
その四	三二
その五	三三







雪くる前	九二
朱き葉	九四
煙れる冬木	九六
都に歸り來て	九八
はつなつ	一〇〇
蟬 頃	一〇二
並木町	一〇四
書生の乞食	一〇六
苗	一〇八
天の蟲	一一〇
植物園にて	一一二
くらげ	一一四
室生犀星氏	一一五
坂	一一九
十月のノオト	一二一
十月のノオト	一二二
その一	
その二	

合掌	その一	一二三
合掌	その二	一二四
合掌	その三	一二六
合掌	その四	一二八
合掌	その五	一二九
合掌	その六	一三〇

秋鳥異志

「青き魚を釣る人」抄出

逢ひて來し夜は	一三五
山なみ	一三六
春の寺	一三八
青き魚を釣る人	一四〇
ふるさとより	一四二
ゆふ餉	一四三
山の温泉	一四四



朱の小箱	一四六
栗賣	一四八
雪來る前	一五〇
哀歌	一五一
挽歌	一五二
ボンタンの詩	一五四

朝の歌

「愛の詩集」抄出

はる	一五九
罪業	一六一
櫻咲くところ	一六二
未完成の詩の一つ	一六四
蒼空	一六六
雨の詩	一六八
自分もその時は感涙した	一七〇

秋くらけ	一七二
この苦痛の前に額づく	一七四
この道をも私は通る	一七八

夕の歌

「第二愛の詩集」抄出

めぐみを受ける	一八二
音楽會の後	一八四
安息日	一八六
街にて	一八九
山間の旅舎	一九〇
みな休息して	一九二
地上の春	一九四
午後	一九七



都會

「寂しき都會」抄出

龜裏 . . . . . 二〇一

青い蝶

「田舎の花」抄出

山上の火 . . . . . 二一五

暗夜 . . . . . 二一六

遠い笛 . . . . . 二一八

城壁 . . . . . 二二〇

歸り花

「忘春詩集」抄出

童心 . . . . . 二二五

つれづれに . . . . . 二二八

つれづれに . . . . . 二三〇

桃の木 . . . . . 二三二

ふいるむ . . . . . 二三四

忘春 . . . . . 二三六

おもかけ . . . . . 二三八

ちちはは . . . . . 二四〇

五月幟 . . . . . 二四一

靴下 . . . . . 二四二

我が家の花 . . . . . 二四四

筆硯に . . . . . 二四六

夜半 . . . . . 二四八

最勝院自性童子 . . . . . 二五〇

象 . . . . . 二五二

駱駝 . . . . . 二五四

道草 . . . . . 二五六



秋日	二五八
歸り花を見る	二六〇
垣にそひて	二六三

浴泉抄

「高麗の花」抄出

浴泉	二六九
うつけものの歌	二七一
新衣	二七四
石一つ	二七六
浅い春	二七九
俗人の歌	二八二
黄ろい蠟石	二八五
灯を剪る	二八七
夕餉のしたくはまだできぬが	二九〇
支那風な景色	二九三

故郷圖繪集

冬日を呼ぶ	二九六
菊を彫る人	二九八
寒竹	三〇〇
寒竹	三〇二
高麗の花	三〇四
わが心もかくあれと	三〇七
洋燈	三一〇
家族	三一一

山の上	三二五
家庭	三二七



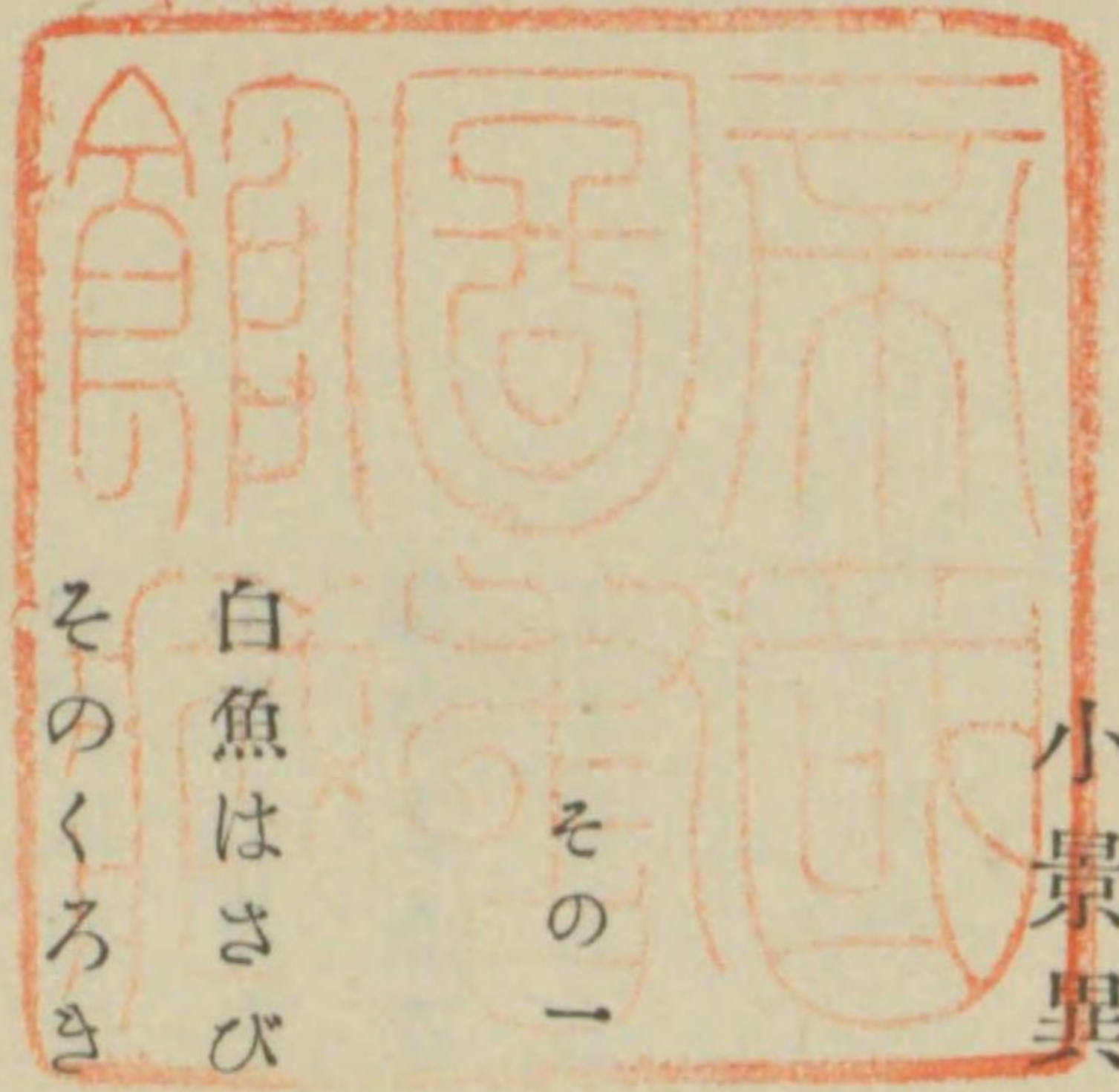
氷を愛する歌

「鶴」抄出

切なき思ひぞ知る	三二一
何者ぞ	三二三
埃の中	三二四
彼女	三二六
彼と我	三二八
情熱の射残	三三〇
人家の岸邊	三三一
友情的なる	三三四
我は	三三六
已の中に見ゆ	三三八
砂塵の中	三四〇

春鳥異志





小景異情

その一

白魚はさびしや

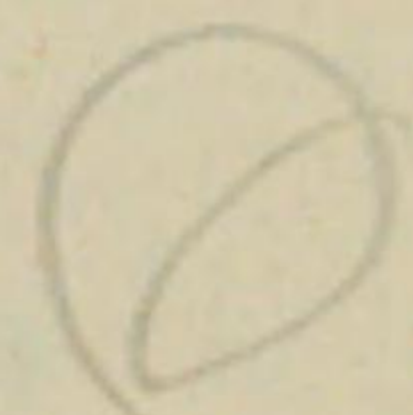
そのくろき腫は何といふ

何といふしほらしさぞよ。

詩集「抒情小曲集」抄出



そとにひる餉ケをしたたむる  
わがよそよそしさと  
かなしさと  
聞きともなやな雀しは啼けり。



その二

伊太

ふるさとは遠きにありて思ふもの。ふるさととは遠きに  
そして悲しくうたふもの。ありて思ふもの  
よしや

うらぶれて異土の乞食かたがとなるとても  
歸へるところにあるまじや。

をのそみ見よは 大じやんの井のたつた  
ふつとふつとふつと  
人の思ふ



ひとり都のゆふぐれに  
ふるさとおもひ涙ぐむ  
そのころもて  
遠きみやこに歸へらばや。  
遠きみやこに歸へらばや。  
遠きみやこに歸へらばや。

その三

銀の時計をうしなへる  
ころかなしや  
ちよろちよろ川の橋の上  
橋にもたれて泣いてをり。



その四

わが靈のなかよりも  
緑もえいで  
なにごとしなけれど  
懺悔の涙せきあぐる。  
しづかに土を掘りいでて  
ざんげの涙せきあぐる。

その五

何にこがれて書くうたぞ  
一時にひらく梅すもも。  
すももの蒼さ身にあびて  
田舎暮しのやすらかさ。  
けふも母ぢやに叱られて  
すもものしたに身をよせぬ。



その六

あんずよ

花着け

地ぞ早に輝やけ

あんずよ花着け

あんずよ燃えよ

ああ あんずよ花着け。

三四



夏の朝

何といふ蟲か知らねど

時計の玻璃のつめたきに這ひのぼり

つうつうと啼く、

物いへぬ蟲けらものの悲しさに。

三五



旅途

旅に出づることにより  
ひとみあかるくひらかれ  
手に青き洋紙は提げられたり。  
ふるさとにあれど

安きを得ず  
流るるごとく旅に出づ。  
麥は雪のなかより萌え出で  
そのみどりは磨げるがごとし。  
窓よりうれしげにさしのべし  
わが魚のごとき手に雪はしたしや。



京都にて

にほやかに戀ひぬれど  
さめゆくものはつめたかり。  
わが心は哀憐にみちわたり  
もののそよぎに泪おちむとす。

雪の青きを手にとれば  
雪は哀しくなじみまつはる。

かばかりふかき哀憐のもよほしに  
いまぞ涙ことごとく流れもいでよ。



流離

わが朝のすずしきころに  
鮮やかなる芽生のうすみどり  
にかかれど  
うれしや沁みきたる。  
こよなきいそしみをもて  
静かなる洋紙をこそこのべにけれ、

そは巡禮のうたごゑをきくごとき  
わがきさらぎの哀調にして  
わかれむとするふるき都に  
とどまりもえぬ心なり  
ああ よく晴れあがりし空のもと  
わが旅のをはりにや  
小鳥すくみごゑして消えもゆくなり。



旅  
上

旅にいづらば  
はろばろと心うれしきもの、  
旅にいづらば  
都のつかれ、めざめ行かむと

縁を見つむるごとく唯信ず。  
よしや趁はれて旅すころなりとも  
知らぬ地上に印す  
あらたなる草木とゆめと唯信ず。  
神とけものと  
人間の道かぎりなければ  
ただ深く信じていそぐなりけり。



三月

うすければ青くぎんいろに  
さくらは紅く咲くなみに  
三月こな雪ふりしきる、

雪かきよせて手にとれば  
手にとるひまに消えにけり  
なにを哀しと言ひうるものぞ。  
君が朱なるてぶくろに  
雪もうすらにとけゆけり。



足羽川

あひ逢はず四とせとなり  
あすは川みどりこよなく濃ゆし、  
をさなかりし櫻ものびあがり  
うれしやわが手にそひきたる、

わがそのかみに踏みも見し  
この土手の芝とうすみどり  
いま冬枯れはてている哀しかり。  
われ永き旅よりかへり  
いま足羽川のほとりに立つことの  
なにぞやおろかにも涙ぐまるは。



犀川

うつくしき川は流れたり  
そのほとりに我は住みぬ、  
春は春、なつはなつの  
花つける堤に坐りて

こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ  
いまもその川ながれ  
美しき微風ととも  
蒼き波たたへたり、



ふるさと

雪あたたかくとけにけり、  
しとしとと融けにけり、  
ひとりつつしみふかく  
やはらかく  
木の芽に息を吹きかけり、

もえよ

木の芽のうすみどり、  
もえよ  
木の芽のうすみどり、



寂しき春

したたり止まぬ日のひかり、  
うつろつまはる水ぐるま。  
あをぞらに  
越後の山も見ゆるぞ  
さびしいぞ

一日もの言はず  
野にいでてあゆめば  
菜種の花は波をつくりて  
いまははや  
しんにさびしいぞ。



みやこへ

こひしや東京淺草夜のあかり、  
けさから飯もたべずに  
青い顔してわがうたふ、  
わがうたごゑの消えゆけば

うたひつかれて死にしもの。

けふは濱べもうすぐもり  
びよろかもめの啼きいづる。



土筆

旅人なればこそ  
小柴がくれに茜さす  
いとしき嫁菜つくつくし。  
摘まんとしつ

吐息つく、  
まだ春浅くして  
あたま哀しきつくつくし。  
指はいためど一心に土を掘る



利根の砂山

風吹きいでてうちけむる  
利根の砂山、  
赤城おろしはひゆうひゆうたり、  
ひゆうたる風のなかなれば

土筆は土の中に伸ぶ、  
なかに哀しみ立てる利根の砂山  
よしや、<sup>ステッキ</sup>洋杖をもて  
君が名をつづるとも  
赤城おろしはひゆうとして  
たちまちにして消しゆきぬ。



氷の扉

たちまちに雪光る山なれ、  
たちまち鳴りてはくもる山なれ、  
四方の氷の扉ひらかれ、  
いつさいは萌えむとす。

この國の草草のなよらかならむことの  
けふはしきりに祈らる、  
この國の草草と  
人人の心ごころに  
よきめぐみのあらむことの、  
しきりにけふは祈らる。



蛇

蛇をながむるころ蛇になる。  
ぎんいろの鋭き蛇になる。  
どくだみの花あをじろく  
くされたる噴井の匂ひ蛇になる。  
君をおもへば君がゆび  
するするすると蛇になる。

霜

總て枯るるものは枯れたり  
うつくしく  
まはだかに  
やがて霜に祈らん。



櫻と雲雀

雲雀ひねもす  
うつらうつらと鳴けり。  
うららかに聲は櫻にむすびつき  
櫻するどく伸びゆけり。

櫻よ

我がしんじつを感じよ  
らんまんとそそぐ日光の中にひろがれ。  
あたたかく樂しき春の  
春の世界にひろがれ。



前橋公園

すゐすゐたる櫻なり。  
伸びて四月をゆめむ櫻なり。  
すべては水のひびきなり。  
四阿屋の枯れ芝は哀しかれども

花園になんの種子たねなりしぞ  
しきりに芽吹き  
きのふよりもなほ萌えづるげ。  
街のをとめの素足光らし  
風に研がれて光るさくらなり。



かもめ

かもめかもめ、  
去りゆくかもめ、  
かくもさみしく口ずさみ  
渚はてなくつたひゆく。

かもめかもめ、  
入日のかたにぬれそぼち  
びよろとなくはかもめどり、  
あはれ都をのがれ来て  
海のなぎさをつたひゆく。



砂山の雨

砂山に雨の消えゆく音を聞けば  
こまやかなる夏のおもひも  
わが身<sup>み</sup>うちにかすかなり。  
草にふるれば草はまさをに

雨にふるれば雨もまさをなり、  
砂山に埋め去るものは君が名か、  
かひなく過ぐる夏のおもひか、  
いそ草むらはうれひの巢、  
かもめのたまご孵らずして  
あかるき中にくさりけり。



魚とその哀歡

うかびくるはかの蒼き魚  
しづかなる燐光とその哀歡との  
かくてもわがところを去りえず。  
やはらかく伸びむとする梢には

わが魚はまた泳ぎそめたり、  
その魚に指ふれむとすれば  
指はころよく  
小さな魚のごとし。



海濱獨唱

ひとりあつき涙を垂れ  
海のなぎさにうづくまる  
なにゆゑの涙ぞ青き波のむれ  
寄せきたりわが額をぬらす、



みよや濡れたる波にうつり出づ  
わがみじかなる影をいだき去り  
抱きさる波、哀しき波。  
このながき渚にあるはわれひとり、  
ああわれのみひとり  
海の青きに流れ入るごとし。



永日

野にあるときもわれひとり  
ひとり、たましひふかく抱きしめ  
ここゑにいのり燃えたちぬ。  
けふのはげしき身のふるへ  
麥もみどりを震はせおそるるか。

われはやさしくありぬれど  
わが越しかたのくらさより  
さいはひどもの遁がれゆく、  
のがるるものを趁ふなかれ、  
ひたひを割られ  
血みどろにをののけど  
たふとや、われの生けること、  
なみだは切に涌くごとし。



時無草

秋のひかりにみどりぐむ  
ときなし草は摘みもたまふな。  
やさしく日南にのびてゆくみどり。  
そのゆめもつめたく

ひかりは水のほとりにしづみたり。  
ともよひそかにみどりぐむ  
ときなし草はあはれ深ければ  
そのしろき指もふれたまふな。



十一月初旬

あはあはしきしぐれなるかな  
かたかは町の坂みちのほり  
あかるみし空はとながむれば  
はやも片町あたり  
しぐれけぶりぬ。

十一月初旬

なめくぢは梢に凍え  
梢はすでに枯れたり  
はや冬の來しなり  
海なりはそらをわたり行く。



松林のなかに坐す

海のしづかはしら羽どり  
秋のしづかはしら羽どり。  
しら羽のとりの消えゆけば  
松の林にうづくまり  
松のみどりを搔きむしりなじみたり。

砂丘とほくつらなり  
そのあひまより海の青い瞳は來る。  
海にかよひしはいつかわかねど  
海におびえしたまをあづけあり。



砂丘の上

渚には蒼き波のむれ  
かもめのごとくひるがへる  
過ぎし日はうすあをく  
海のかなたに死にうかぶ。

音もなく砂丘の上になづくまり  
海のかなたを戀ひぬれて  
ひとりただひとり、  
はるかにもひつかれたり。



水すまし

水すまし

水をすましてきえにけり。

消えしまにあらはれ

わがたそがれをさびしうす。

水そこになにのちからぞ

ゆらぎてむせぶ水すまし。

をすとめすとは離れずかさなりて

なさけもふかに過ぎてゆく

をすとめすとはかさなりて。



秋  
思

わがこのごろのうれひは  
ふるさとの公園のくれがたを歩む  
芝草はあつきびろうど  
いろふかぶかと空もまがへり。

われこの芝草に坐すときは  
ひとの上のことをおもはず  
まれに時計をこぬれにうちかけて  
すゐする伸ぶる芝草に  
ひとり言しつゝ秋を待つなり。



しぐれ

さむざむと大根畑に雨がふつてゐる  
しぐれのあめが  
ぬらしてゆく

みぞ萩たでの  
草草にいたるまで  
さむざむとしぐれに濡れてさびしむ。



雪くる前

凍みて痛めるごとく  
はてしなく  
こころ輝き  
枯木のうへにひびきを起す。

わが君とわかれて歩めば  
あらはるとなく  
消ゆるとなく  
降りつむ我が手の雪を  
ああ 君は搔く。



朱き葉

枯木をゆすりその朱き葉を落す  
そのもとにわれはさりえず。

なみ立てる枯木は肌にしみてうつり  
肌は青くも冷えたり。

今しづかにしほらしき心立ち戻り  
朱き葉をふどころに去らむとすれば  
朱き葉はわが肌になじみえず。



煙れる冬木

もみづる山に朱き日は入る  
しづかなることわが眼はひとりかがやけり。  
手に觸るれど冬木の幹は青からず  
その指はただに冷えたり。

さしのぼる煙のなか  
消えむとするみじめなるわれなるか。  
はりがねのごとき草の鳴る中  
そのうちにわれの消えゆく音あり。



都に歸り來て

眠ることなかれ  
つねに牙えたる腫をもて  
都會のはてをうち眺め  
どよみの中に投げ入れよ。

つつしみ深く流れ行け  
みなぎる渾身の力をもて  
あなたに現れ  
あらぬ方に輝きつつ  
輝ける街路のかたに  
眼もくらやみ並木にすがり  
みやこの海をわたり行け。



はつなつ

いよいよ青き世界となり  
われものを食はず終日は  
みやこの街をさまよひぬ。

みやこの街はかぎりなく  
いよいよ悲し世界となり  
いよいよ青き世界となり。



蟬  
頃

いづことしなく  
しいいとせみのなきけり。  
はや蟬頃となりしか  
せみの子をとらへむとして

熱き夏の砂地をふみし子は  
けふはた何處どこにありや。  
なつのははれに  
いのちみぢかく  
みやこの街の遠くより  
空と屋根とのあなたより  
しいいとせみのなきけり。



並木町

茫として  
うつつを綴る  
夜霧の並木町、

輝ける巷のそらに  
ひやかかに身は浮きあがる  
ああ都にかへり来て  
再びさまよひ疲れんとするか。  
燃えつつそそぐ  
九月はじめの夜の霧。



書生の乞食

坂を下りゆかむとするは書生の乞食なり。  
 乞食の手にいちめん<sup>ソムル</sup>に苔が生え  
 乞食の手に魂は躍る、  
 乞食の眼に觸るるの林檎バインアップルの類、

もしくばカステイラ・ワツブルのたぐひ、  
 それらは總て味覺を失ひ  
 ワツブルのごときは實に甚だしく憔悴す、  
 乞食は祈り  
 乞食は求め  
 遠方へ遠方へ去る。



苗

なたまめの苗、きうりの苗、  
いんげん、さやまめの苗、  
わが友よ  
あのあはれ深い呼び聲うをして

ことしまた苗賣りがやつて来た。  
あのこゑを聞き  
あの季節のかはり目を感じることは  
なんとといふ微妙な氣になることだらう。



天の蟲

松はしんたり、  
すがたを見せぬ日ぐらしの  
こゑを求めば  
あらぬ方より

かなかなかなと寂しきものを、  
松のむら立つ  
寺の松、  
梢をながめかなかなを求むれば  
かなかなむしは天の蟲、  
鳴くとし見れば天上に  
かなかなかなと寂しきものを。



植物園にて

とらへがたきザボンの輝き、  
玻璃のうちより  
匂はしき霧を吹きあぐる。

ザボンよ

あをき梢にむすべ。  
離るることはなく  
ふかくしんじつに  
なみだもて  
葉の上に梢にむすべ、  
しかして真にかがやけ。



くらげ

秋なれば  
くらげ渚に  
うちあげられ  
玻璃のごとくなりて死す。

室生犀星氏

みやこのはてはかぎりなけれど  
わがゆくみちは股々たり  
やつれてひたひあをかれど  
われはかの室生犀星なり、



あしもとは定かならねど  
 みやこの午前  
 洋杖ステッキをもて生けるとしはなく  
 ねむりぐすりのねざめより  
 眼のゆくあなた縁けぶりぬと  
 午前をうれしみ辿り  
 うつとりとうつくしく  
 たとへばひとなみの生活をおくらむと  
 なみかぜ荒きかなたを歩むなり。

されども既に四月となり  
 さくらしんじつに燃え撩亂たれど  
 撩亂の賑ひに交らず  
 賑ひを怨ずることはなく唯うつとりと  
 洋杖ステッキをもて  
 つねにつねにただひとり  
 坂を降らむとするわれなり。  
 ときにあしたより  
 とほくみやこのはてをさまよひ



ただひとりうつとりと  
息絶えむことを専念す。  
ああ四月となれど  
櫻を痛めまれなれどげにうすゆき降る  
哀しみ深甚にして坐られず  
たちまちにして感激す。

坂

この坂をのぼらざるべからず、  
喘ぎつつ攀らざるべからず、  
すでに櫻はしんじつを感じて  
坂のふた側に立ちつくせども  
悲しき室にかへらねばならず、  
日としてわが靈  
しほらしからざりしことはなけれど



ただ坂の上をおそる。  
 いまわが室は寂として  
 かへらむとするわが前に  
 鼠を這はしめんとするか。  
 ああわがみじめなる詩稿を携ち  
 悄として  
 されど坂をのぼらざるべからず。  
 坂は谷中より根津に通じ  
 本郷より神田に及ぶ  
 さんとして  
 眼くらやむなかに坂はあり。

### 十月のノオト

その一

時計は銀にあらざれば光らず、  
 帆は布をもて金色を胎ましめざるべからず。  
 頭の垂さがるやうな詩。深き精神のそこひ  
 より搔きのぼれ。



その二

こひしさにけぶりこもりて畑土に  
ゆめのやうに雪はきえた。

わたしは君のてがみを食べてしまつた  
わたしは胃を悪くした。

合 掌

その一

坂はびろうど夕日炎炎。  
坂はみどりの下り坂。夕は祈りの鐘が鳴る。



その二

耶蘇は畑中ゆふぐれに  
 われもゆふぐれ畑中に  
 葱はおとろゆ  
 夏の日  
 耶蘇はものいふ

われもいふ  
 畑はひかりて麥を吐き  
 耶蘇はゆふぐれ畑中に  
 われもゆふぐれ畑中に。



その三

かうべ垂れ  
いまは縁を合掌す。  
きびしき心となり  
みづからを責むる心となり  
山のふもとにわれ住みて

衰へはてて  
いまは縁の木木に  
その高さあたひに  
かうべ垂れ合掌す。



その四

むしけらのごとき  
ひとみのけがれ。  
けがれしまま  
けふは知る  
深きざんげのあたひを知る。

その五

みやこに住めど  
心に繁る深き田舎の夏ぞ  
日を追ひては深む  
いつくしみある地の夏ぞ。



その六

ながれに向ひ釣を垂る  
みなそこふかく  
ひそめるものに觸れむとし  
祈るがごとく釣を垂る。  
崖よりいまはなみだ垂れ

魚介のあなた  
ながれに感ず。  
波のおもみはきたる肩の上に  
祈るがごとく釣を垂る。







詩集「青き魚を釣る人」抄出

逢ひて來し夜は

うれしきことを思ひて  
ひとりねる夜はさいはひの波をさまり  
小さくうれしさうなるわれのいとしさよ。  
やがてまた  
うれしさを祈りに乗せて  
君がねむれる家におくらむ。



山なみ

うれしや  
ふるさとに自働車がしなをつくりて  
鋭き山なみのもとを過ぎゆきぬ。

山より月のぼりいで  
われらがうへに瑠璃をはりつむる。  
こよひこそ君に  
わが思ひあかさむ。



春の寺

うつくしきみ寺なり  
み寺にさくられうらんたれば  
うぐひすしたたり  
さくら樹にすずめら交り  
かんかんと鐘鳴りてすずろなり。

かんかんと鐘鳴りてさかんなれば  
をとめらひそやかに  
ちちははのなすことをして遊ぶなり。  
門もくれなる炎炎と  
うつくしき春のみ寺なり。



青き魚を釣る人

ほのかなるなやみのうちに  
ひと日過ぎゆき  
ひと日しづかにかへりくる。  
魚はかたみに青き眼をあげ  
噴きあげに打たれかなしむ。

藍のうるこも痛く  
つりうどの眼もいたく  
魚はかなたにのがれゆき  
鉢なでしこの日の表  
つよき反射のなかに浮きもかなしむ。



ふるさとより

ふるさとのとある草場にうづくまり  
都とわかれ、秋の日をあび、  
わがながく去りえざりし雑闇のなか  
わが頬をながれたるものは冷たかり。

ゆふ餉

ふるさとの家にそむかば  
誰がわがために飯を與ふものぞ。



山の温泉

めざむれば、寂しやひとり  
うぐひすの蒼き谷間に啼き居れり。  
寂しや、ただに啼き居れり。  
朝はすずしく明らかによくぞ晴れたり

と見れば  
谷あひの畑にいとも静かに  
畑打つをみなあり  
寂しやわれひとり山の温泉<sup>ゆ</sup>にありて  
本などを讀みて哀れむ。



朱の小箱

君がかはゆげなる卓つくまのうへに  
いろも朱なる小箱には  
何をひめたまへるものなりや。  
われ君が窓べを過ぎむとするとき

小箱の色の目にうつり  
こころおどりて止まず。  
そは、やはらかきりぼんのたぐひか  
もしくば  
うらわかき娘ごころをのべつづる  
やさしかるうたのたぐひか。



栗 賣

つゆふかきあしたなり  
栗呼ぶこゑはかなしみて  
晴れしがなかに起りくる  
響にもかげのさしそふ

おそ秋のあしたの路をさびしめよ。  
そのこゑはをみななり。  
鋭どさを加へつつ  
あでに優しく  
そのこゑはをみななり。



雪來る前

ひとすぢに逢ひたさの迫りて  
酔のごとく烈しきもの  
胸ふかく走りすぐるときなり。  
雪來ると呼ばはるこゑす。  
はやも白くはなりし屋根の上。

哀歌

君はかの蓬の花のあはれになびけるを  
こころなく見過ごしたまひしことありや。  
あじけなく匂ひなきもの  
うすら日にそよげるを見たまはば  
かたみになみだながるべし。



挽歌

秋はみじめにしたたり  
ゆうぐれはながれそめたり。  
空に落葉のかげ映り  
かすかに青き匂ひのちらばへり。

手はひたひの上に冷え  
さみしく唇はかたくとざされたり。

ともよ、おん身の肌にすがりつき  
たましひはくらくすすりなく。  
ああ、はぐれしかげにすがりつき  
たましひはくらくすすりなく。



ボンタンの詩

ボンタン 實る樹のしたにねむるべし  
 ボンタン 思へば涙は流る。  
 ボンタン 遠い鹿兒島で死にました  
 ボンタン 九つ  
 ひとみは眞珠、

ボンタン 萬人に可愛がられ  
 いふはにほへ らりるれろ  
 ああ らりるれろ  
 可愛いその手も遠いところへ  
 天のははびと尋ねゆかれた。  
 あなたの おぢさん  
 あなたたづねてすずめのお宿  
 ふぢこ来ませんか  
 ふぢこ居りませんか。



朝  
の  
歌



詩集「愛の詩集」抄出

は  
る

おれがいつも詩を書いてゐると  
永遠がやつて来て  
ひたひに何かしらなすつて行く  
手をやつて見るけれど  
すこしのあとも残さない素早い奴だ。



おれはいつもそいつを見ようとして  
 あせつて手を焼いてゐる  
 時がだんだん進んで行く  
 おれの心にしみを残して  
 おれのひたひを何時もひりひりさせて行く。  
 けれどもおれは詩をやめない  
 おれはやはり街から街をあるいたり  
 深い泥濘にはまつたりしてゐる。

罪業

自分はいつも室に燈明をつけてゐる  
 自分は罪業で身動きが出来ない氣がするのだ  
 自分の上にはいつも大きな  
 正しい空がある。  
 しまひには空がずり落ちてくるのだ。

ある時、故郷の寺院にて



櫻咲くところ

私はときをり自分の行爲を懺悔する  
雪で輝いた山を見れば  
遠いところから来る  
時間といふものに永久を感じる。  
ひろびろとした眺めに對ふときも

鋭角な人の艶麗がにほふて来るのだ。  
艶麗なものに離れられない  
離れなければ一層苦しいのだ。  
その意志の方向をさき廻りすれば  
もういちめに櫻が咲き出し  
はるあさい山山に  
まだたくさんに雪が輝いてゐる。



未完成の詩の一つ

赤赤しい夕焼

そのしたにぎつしりつまつた街と家。  
それを見てゐるとつかれてくる  
そこから何が映つて来るのか。

そこから自分の心に沁み亘つてくる  
夕ぐれどきのもの賣のこゑごゑ。  
あはれな時雨のにほひにまざつた  
いろいろな生活のこゑごゑ  
窓にもたれて自分はそれを聞いてゐる。



蒼空

おれは睡いのだ  
かれはかう言つてやはり睡つてゐた  
かれの上には  
大きな蒼蒼とした空が垂れてゐた。  
かれの目は悲しさうに時時ひらく  
日かげはうらうらとしてゐる。  
地主が来て泥靴をあげて蹴りつけた

けれどもかれはすやすやと  
平和にくつろいで寝てゐた。  
やがて巡査が来て起きろ起きろと言つた。  
かれはしづかに眼を開けて見て  
また寝込んでしまつた  
みんなは呆れてかへつて去つた。



雨の詩

雨は愛のやうなものだ  
それがひもすがら降り注いでゐた。  
人はこの雨を悲しさうに  
すこしばかりの青もの畑を  
次第に濡らしてゆくのを眺めてゐた。

雨はいつもありのままの姿と  
あれらの寂しい降りやうを  
そのまま人の心にうつしてゐた。  
人人の優秀なたましひ等は  
悲しさうに少しつかれて  
いつまでも永い間うち沈んで  
永い間雨をしみじみと眺めてゐた。



自分もその時は感涙した

巡査は酔つばらひを靴で蹴り飛ばした  
酔つばらひの頭から血がながれた  
これでよい  
かうしておかなければ性が懲りない  
かう言つて荒縄でぐるぐると括り上げた。

繩はからだに食ひ込んだ。  
あたりにゐる人人は  
よい氣味だと言つてゐる  
酔つばらひはへし潰れたやうになり  
もう抵抗力が無くなつてゐた。  
酔が醒めてだんだん青くなつてゐた  
その目から大きな涙が流れてゐた。



秋くらげ

山には遠い海岸に  
 くらげはまつさをに群れてゐた。  
 くらげは心こゝろから光つてゐた。  
 あるものは岸邊に打ちあげられ  
 松並木はこうこうと鳴つてゐた。

くらげにはくらげの可愛さがあつた。  
 私はそれをつくづく眺めてゐた  
 山はみな高く海べに映り  
 ときをり雪もふつてゐた。  
 くらげは眺めて居れば居るほど  
 あはれな 生甲斐のないもののやうな気がした。

加賀 上金石海岸にて



この苦痛の前に額づく

よごれた寢臺から起き上ると  
自分は窓をあけて  
よい空気をとり入れた。  
夜は暗くじめじめした雨になつて。  
塔の姿は炭のやうに黝ずんでゐた。  
彼女は紙のやうなうすい肉體を  
痛々しさうに身じまひした。

麻のやうにほそい腕や  
隣寸の棒のやうな手足やを  
自分は苛酷な目つきで眺めた。  
その瘠せた胸から骨がすいて見えた。  
自分はあらしのやうな恥しさを感じた。  
自分は寢臺から飛び下りて  
彼女のきたない靴を接吻しようとした。  
自分は床に身を投げて  
充ち亘る感動に震へてゐた  
彼女は呆れたやうに自分を眺めた。



自分は彼女の中に  
澄んだ　きれいな性質を見た。  
人がよすぎると  
こんな汚ない恥さらしな  
自分の身を切賣することになるのだ。  
自分はまじまじと永い間彼女を眺めて  
胸をさし上つてくる  
座に堪へられないものを感じた

自分は窓の方の暗いところに立ち  
じめじめしたこの境界の屋根を眺めてゐた。  
彼女は心配さうに  
私のうしろから  
私にいろいろ話しかけた。  
このくらやみの小路に  
まだ健全な魂の存在してゐることを  
自分はどうして信じなかつたのだらう。



この道をも私は通る

一七八

これはどうしたのだ  
この闇のなかにうぢうぢとうごいて  
銀貨一枚で裸體にもなる女等。  
君はこのやうな混濁の巷で  
その美しい顔をどうするつもりだ。  
刷りへらした活字のやうな肢體は  
釘のやうに歪つたくちびるは

その毒毒しい人を食つたやうな調子は。  
永久世の中へ出て行かれなくなるまで  
稼いでも稼いでも  
貧乏してゐる君達。  
手も足もすりへらして終ふまで  
たましひをめちやくちやに傷めるまで  
しぶかみのやうに  
くしやくしやになつた肉體。  
君だちを背景にしてゐる  
この人類の生きやうはどうだ。

一七九



いろいろの若い熱いたましひが  
君らの傍にゐることを望んでゐることはどうだ。  
この道を通るにも  
自分は涙を感じる。  
一步そとへ出れば  
恐ろしい都會の大街道。  
家に居ればふしぶしのいたむやうな稼ぎやう  
いまこそ私もこの道を通る  
お前達の送る毒の花をも  
自分は優しく接吻して上げる。

夕  
の  
歌



詩集「第二愛の詩集」抄出

めぐみを受けける

種を蒔いて置いたら  
みんな生えて出て来た。  
僕は感謝した  
一粒のまちがひなく  
からを破つて飛んで出た  
皆揃つて聲をあげてゐるやうだつた。



## 音樂會の後

人人の心はかなり深くつかれて  
濡れてでもゐるやうに  
愉しいさざなみを打つてゐた。  
人人は音樂が語る言葉の微妙さについて囁いてゐた。  
階段から芝生に  
芝生の下萌えを踏んで

もはや街燈のついた公園の方へ歩いてゐた。  
楽しい女の友をもつひと、  
妻をもつひと、  
それらはみな一樣な疲れのうちに  
ふしぎと生き生した興奮を抱いて歩いてゐた。  
私もそれらの群のあとにつづいて  
寂しい自分の靴音を感じ  
暮近い公園の方をあるいてゐた。



安息日

場末の屑屋ばかりが住む  
町の夕方があるいて自分は平和になつた。  
家家の窓や軒には  
それぞれの花の鉢も置かれ  
すだれもかかつて  
遅しい夫妻はみな肌ぬぎになり

小さい子供を食卓の前に坐らせ、  
愉しい講談本をよんだり  
茶をわかしたりしてゐた。  
その妻子らの胸は太つてがつしりしてゐた。  
自分らにも増してこの平和な光景は  
いたく自分を喜ばした。  
かれらは決して貧しくなく  
ゆたかに飽きるほどの仕事を終つて  
いま酬いられてゐると思ふと



自分も勵まされたやうな氣がした。  
しかも夕方の蒼みある空氣はしつとりと  
はや露の氣を含んで  
充分な夜涼をかれらの家に送つてゐた。

街にて

自分は悩みや苦しみがあるごとに  
街から街を歩きつづめる  
街をあるくとき全く心が燃えるやうになる



山間の旅舎

その水はきれいな玉をなしてゐる  
水は寂しいものだ  
清浄なものだ  
一日しづかに入浴してゐて  
自分がこの山間にあることを

人間の生活が蟻のやうに巧みに  
荒い山河を圍繞してゐることを  
目に浮べて考へてゐた  
そとには落葉の音がしてゐる、  
あるかないかの音だ。



みな休息して

夕方になると  
白いかもめの群が  
隅田川の方を指して歸つてゆく。  
空の澄んだ日は  
くつきりと浮彫りにされ

優しいつばさの音まで  
はたはたと聞えて来る。  
毎日のやうに規則正しく  
夕方になるとそれが見られる。